INTERVIEW：インタビュー

俳優

反町 隆史さん

16歳でモデルとしてデビューし，今や，人気TVドラマシリーズ「相棒」の冠城亘役をはじめとして，誰もが知る俳優として，ご活躍中の反町隆史さん。一見，俳優と弁護士は全くの別業種のようですが，仕事に対する取り組み方は，かなり共通する部分があるように感じました。特に，反町さんの意欲的・挑戦的な生き方は，私たちにとっても，大きな参考になると思います。そして，何より家族を大事にし，2人のお嬢様の健やかな成長を願う父親としての姿も印象的でした。

聞き手・構成：志賀 晃，田中みどり

── 2019年7月期のドラマ「リーガル・ハート～いのちの再建弁護士～」では，企業再生に携わる主人公の村越弁護士役を演じていらっしゃいましたが，弁護士役は初めてですか？

初めてです。再建弁護士というのは，弁護士の仕事の中でも少し特殊なものだとは思いますが，「会社再生」というのは，そのストーリー自体が大きなドラマですよね。それがこの仕事をお引き受けする理由の一つとなりました。

── 原作者の村松謙一会員とは，お会いになりましたか？

はい。事務所に伺って，お話をする機会を頂きました。弁護士さんというと，固いとかとっつきにくいと思われがちですが，村松先生は，全く違って，とてもフランクな方でした。とてもお話がしやすくて，話をしているうちに，自分のことをすべてさらけ出して話してしまいそうだと感じました。一度，ゴルフも一緒に行ったことがありますよ。村松先生の事務所に飾ってあったプラモデルもすごかったですよ。

── 実在の人物がモデルの場合の演技というのは，やはり難しいのでしょうか。

一般的に，実在の人物であっても，大河ドラマなどで歴史上の人物を演じたり，すでに亡くなった方を演じることは多いのですが，現在，ご活躍中の人物を演じる機会は少ないですし，私が演じる人物と，そのモデルとなっている実際の人物との距離感の取り方は，やはり難しいです。そのため，村松先生から伺ったお話や，あるいはオーラのようなものは，役柄を理解し，一つ一つ作り上げていくための大きなヒントとなりました。そして，第一話を見てくださった村松先生から，「すごくよかった。感動した」というお褒めの言葉を頂けたので，これでよかったのだと確信できました。

── 先ほど，ゴルフの話が出ましたが，ゴルフはお好きですか？ ゴルフ以外にも，どのようなご趣味をお持ちですか？

アウトドアが好きですね。ゴルフも釣りも好きです。琵琶湖のあたりに別荘があり，そこで自然を楽しんでいます。

── ご家族も，一緒に別荘に行ったり，アウトドアの趣味を楽しまれることが多いのですか？

娘たちも部活などで忙しく，なかなか時間が合わないので，最近は，友人と行くことが多いです。でも，娘たちが小さいときには，家族でよく出かけていましたよ。

── 2人のお嬢様がいらっしゃるとのことですが，お父様として，どのように接していらっしゃいますか？

よくいろいろなところで言っているのですが，父親として，彼女たちに何かプレゼントするならば，「健康な身体」ですね。彼女たちは，これから，いろいろな将来の可能性や選択肢に向き合わなければならないと思いますが，そのときに不可欠なのは，自分の力で立って歩いていくための体力や精神力であると思っています。ですから，健康な身体はとても大事ですし，健康に育ってくれることが一番の願いです。

そして，親としては，彼女たちがいかなる選択をしようとも，孤立させるようなことはせず，ずっと寄り添っていきたいと思っています。

── ご自身の健康に対する意識も高いのですね。

どのような人でも，生活するにあたって最も大切なのは，健康であり，身体ですよね。身体の健康を保つことで，気力・精神力に繋がっていくと思います。私も，自分なりに極めていきたいなと思っています。

── 具体的にはどのようなことをなさっていますか？

やはり，まず食べ物ですね。娘たちの健康のためにも，家族の口に入るものは，極力，オーガニックのものを選んでいます。あとは，週3回から4回，ジムに通って，ウェイトトレーニング，水泳，ランニングなどをやっています。

── お仕事をするにあたって，やはりご家族の存在は大きいですか？

それはそうですね。家族がいるから，自分も頑張れるというのは，言うまでもありません。もちろん，私が妻や娘たちを励ますこともあれば，家族から私が励まされることもあります。

よく言われることですが，妻は，自分のお腹を痛めて娘たちを産んでいますので，子供が生まれた瞬間から母親の顔になっていて，すごいなと思いました。父親である私は，出産には立ち会いましたが，明白に「父親になった」という意識というより，「何か不思議な感覚」という感じなんですよね。そのときの感覚は，今でも記憶にあります。でも，その不思議な感覚が，家族でさまざまな経験を重ねていきながら月日を経るうちに，一つの家族になっていくんだなぁということを，最近，しみじみと感じますね。

── 次に，人気TVドラマシリーズである「相棒」についてお伺いします。反町さんが「相棒」に出演をなさったのは，シーズン14からですよね。長年にわたって続いているドラマで，新たな“相棒”になることについて躊躇や葛藤はありましたか？

5年ほど前にマネージャーから，「『相棒』の仕事の話が来ているのだけど，やってみないか」と言われたときには，躊躇というより，真剣に悩みました。ゼロから作るドラマならば，私もゼロからやっていけばいいのですが，「相棒」は，すでに国民的刑事ドラマとして高い人気を確立していましたし，その人気の一翼を担ってきた歴代の“相棒”の方々もいらっしゃる。そういうなかで，「新顔」として参加する自分がどこまで何ができるのだろうか，期待されている以上のことができるのだろうか，と考えてしまったのです。

でも，悩んでいるだけでは答えは出ませんね。最後の決断の決め手は，このドラマの主役である水谷豊さんが，私が出演した別のドラマでの演技を見てくださって，私を選んでくださった，ということですね。大先輩から，そのような言葉を頂けることは，やはり，自分にとっては非常に大きな意味のあることでした。それがきっかけで，杉下右京（編集部注・水谷豊氏が演じる「相棒」の主役）の“相棒”という大役をお引き受けし，自分なりに一生懸命考えながら，挑戦していくことを決断しました。

── 反町さんが“相棒”になったシーズン14から，すでに5年目，シーズン18を迎えましたね。

はい，そうですね。最初から何年やると決まっているわけではないのです。シーズン14をやってみて，次にシーズン15を続けることになり，次は3年間はやってみようということでシーズン16になり，そして，今シーズン18です。がむしゃらに取り組み，年数を重ねていくうちに，見えてきたものもあります。

── シーズン14では，「相棒」の中では「新顔」の立場にあったと思いますが，やはりご苦労もあったのでしょうか。

「相棒」の製作チームは，主演の水谷さんを中心として，すでに15年近くやってこられています。もちろん，「相棒」というドラマに対する愛情も深いですし，出演者・スタッフ同士の信頼関係も強いです。特に水谷さんは，俳優としてのキャリア，知識，経験のすべてにおいて，私とは段違いです。正直，大先輩でいらっしゃる水谷さんが演じる杉下右京の“相棒”を務めるのは，精神的にも並大抵の努力では難しいと思います（笑）。私が一生懸命走っても，とても追いつくことなどできません。

でも，追いつくことはできなくても，少しずつ，近づくことができるのではないかと。1年目は1歩，2年目は3歩，3年目はできれば10歩とか。少しでも近づいていく努力をし，「『相棒』の仕事をやって本当によかった」と思える日が迎えられたらいいな，と。それができたならば，自分なりの挑戦の結果に納得ができるかなと思っています。そういう思いで一生懸命5年間やってきた感じですね。

── 反町さんが演じていらっしゃるのは，法務省出身の「冠城亘（かぶらぎわたる）」という役ですが，そのキャラクターのとらえ方も，シーズンを重ねるにつれて変わってくるものなのでしょうか。

いや，特には変わらないですね。歴代の“相棒”の方々も，それぞれ個性のある“相棒”を演じてこられましたが，特命係に新たな“相棒”がやってきて，杉下右京という先輩との関係，そして，周囲の空気がどう変わっていき，特命係としてどう馴染んでいくのかも，このドラマの見どころだと思います。そして，冠城亘は，法務省出身ということで，仕事能力が高い人物設定であると理解しています。そのため，「杉下さんから仕事を任せてもらえる冠城亘」を意識して演じています。

── ドラマとか映画は，長期間にわたり，多くの方々が関わって作り上げていくものだと思いますが，時には，人間関係が難しいこともあるのでしょうか。

そうですね。当然ですが，個人プレーとは全く違います。人間同士ですから，お互いに，好き嫌いの問題はあると思います。それは，どんな仕事でも同じですよね。でも，ドラマでも映画でも，皆で協力しなければ作品は出来上がりません。そして，その一つのものを作り上げていく過程においても，皆で喜びを分かち合うことが大事であると思っています。仮に，人間関係上，何らかの違和感があったとしても，その違和感は封じて，意識的によいところを見て前に進んでいくようにしています。それが，チームの一員としての自分の役割ですし，また，自分自身への成長に繋がると思っています。

── 仕事の選び方はどのようになさっていますか？

今回は「いい人」を演じたので，次は「悪い人」をやってみようかな，という気持ちになることはありますが，お仕事の話は，時々のタイミングもありますので，お話が来たときに考える，という感じでしょうか。

もちろん，自分としては，いろいろな役柄に挑戦してみたい部分もあります。ただ，自分がこれまで作り上げてきたイメージというものもあり，そのイメージと全く違う仕事が来ることはほとんどありません。でも，その一定のイメージの中でも，ほんの数パーセントかもしれませんが，自分なりに，少し変化をつけてみたり，新しいことに挑戦してみたりはしています。

── 挑戦的に仕事に取り組んでいるように見受けられます。

私は，先輩に声をかけられて16歳のときにモデルになりました。当時，特にやることもなかったですし，稼げるかな，と思って（笑）。ちょうどモデルブームのときで，私が所属したモデル事務所にも，特にやることもないからモデルになったという子たちがたくさんいました。

こういうときに，みんなが，「やりたい」と言って手を挙げる仕事は，かっこよくて，クオリティが高い仕事です。それは当たり前ですよね。逆に，条件が悪かったり，かっこ悪い仕事は，誰もやろうとしない。それは，自分のプライドの問題もありますし，自分の価値が下がるかもしれないという不安が出てくるからだと思います。私も，若い頃はそうでした。

でも，だんだん，かっこ悪い仕事であっても，仕事として来たものはやらなきゃいけないと思うようになりました。その仕事を引き受けてみることで，もしかしたら，次に繋がる何かがあるんじゃないか，と。もちろん，本当にこの仕事を引き受けてよかったのかなと不安に思うことだってありますよ。でも，とにかく，何が何でもレールの上に乗ることが大事。レールの上で，時速50㎞で走るのか，100㎞も出せるのかは，自分がいかに努力をするかにかかっていますが，それ以前に，レールの上に乗っていなかったら，大量に燃料を入れようが，車両をピカピカに磨こうが，前に走ることさえできませんよね。だから，今も，私はそういう気持ちをもって，「とにかくやってみる」ということをとても大事にしています。「相棒」でも同じです。そして，やってみた結果，さらにいろいろなものが見えてきます。これも，すべてが私の経験であり，財産となっています。

── いくら芝居とはいえ，他人の人生を演じることは，大変ではないですか？

映画やドラマでは，演じ手側は，自分の気持ち，というか，魂を入れなければ，リアル感を出すことはできないと思っています。気持ちが入らなければ何をやってもダメですね。

たとえば，「相棒」のような刑事ドラマでは，毎回1時間という枠の中で，刑事役が犯人と直接対決しなければならないシーンが必ずあります。そのときに犯人と話すのは杉下右京がメインで，冠城亘は，横にいたり，ちょっと話をしたりするだけのときであっても，その場にいるだけでも疲れてしまいます。でも，それだけ演技に気持ちが入っているということでもあるんだと思いますね。

── 最後に，弁護士に対するメッセージがあればお願いします。

弁護士さんは，依頼者の方からの相談を受けて，依頼者の気持ちに寄り添う仕事だと思います。それは，自分の気持ちを依頼者に寄せるという意味では，役者と似ている部分があるのではないでしょうか。しかも，弁護士さんは，裁判の場面や相手方との対決の場面では，冷静を装わなければならないときもあると思います。

内心の感情では怒りまくっていても，平常心を保っているような冷静な顔をしなければならない。そういう面では，全く職種は違いますが，弁護士さんの仕事を自分なりに理解できるような気がしていますし，本当に大変な仕事だなと思います。

どんな人でも，人生ではいろいろなことが起こります。そういう時に身近に相談できる人は必要です。何か困ったときに，「あ，この先生に相談に行こう！」と脳裏に浮かぶ人が，弁護士さんだと思っています。

プロフィール　そりまち・たかし

1973年埼玉県生まれ。学生時代からファッションモデルとして活動。1994年，テレビドラマ『毎度ゴメンなさぁい』で俳優としてデビュー。以降，話題のドラマや映画，CMに多数出演。2015年10月からテレビ朝日『相棒』シリーズで4代目相棒役を務める。2019年，テレビ東京ドラマBiz『リーガル・ハート～いのちの再建弁護士～』で主演。主な出演作品にテレビドラマ「ビーチボーイズ」「GTO」「限界集落株式会社」，映画「男たちの大和―YAMATO」「蒼き狼～地果て海尽きるまで～」他。